

精神看護学実習における学生のポジティブ体験の分析

下野 義弘

要 旨

本研究の目的は、精神看護学実習における学生のポジティブ体験とその背景を明らかにすることである。看護学科3年次生46名が質問紙に回答した。質問紙は近藤ら⁹⁾が開発した「精神看護学実習におけるポジティブ体験についてのアンケート」を使用した。質問項目は、実習全体の評価、受け持ち患者の反応、学生自身のコミュニケーション、看護実践、臨床指導者の承認・助言、教員の承認・助言、実習グループ、精神看護への関心の8領域32項目で構成されていた。

分析の結果、精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価は4.85点～5.72点と高い評価を示し実習グループが最も高かった。実習全体のポジティブ評価の主要な関連因子は教員の傾聴・承認・的確な助言と、患者の反応に変化があったこと、自分らしく行動できたこと、精神看護の面白さを感じたことなどであった。精神看護学実習の達成感には、患者とのコミュニケーションの取り方や、必要な日常生活援助が分かったこと、学生自身においては、自分らしく行動できたこと、自分が成長したことが関連していた。患者とのコミュニケーションの成立、自己成長の実感、実習のしやすさや指導者・教員との関わりが、精神看護をやりたいという関心につながっていた。

キーワード：ポジティブ体験、精神看護学実習、看護学生

1. 緒 言

看護基礎教育における臨地実習は、学内の講義・演習で習得した知識と技術を医療施設等の実践の場で学習する機会として重要である。本学では精神看護学実習は専門教育科目の実践力を発揮する領域に位置づけられており、看護学科3年次生後期の領域別実習の一つとして実施されている。

これまで精神看護学実習における看護学生の学びにおける先行研究では、学生の精神科看護に抱く思いの報告¹⁾や、学生の技術到達度に関する報告²⁾、学生の実習における学びを明らかにした報告³⁻⁶⁾があり、指導者としてのあり方や指導の内容の検討が実習記録やレポートを使って行われている。

一方、学生を受け入れている精神科の臨床現場では、SST (social skills training) のように慢性精神障害者の良い点に着目しそれを伸ばすことによって障害を目立たなくしようとする考え方に基づいたポジティブ・フィードバックを重視している。また彼らの地域生活を再構築しようとするラップのストレングスモデルによるリカバリーの促進なども同様の考え方によって実践されている。

その視点で捉えれば、精神看護学実習でも、患者のポジティブな面に焦点を当てたケアが重要である。しかし、患者は自身の問題を系統的に説明したり、

明確に表現することが少ない。そのため学生は患者の表現を促し整理しながらその背景にある看護問題を認識し具体的な看護援助に結び付けようとするが、否定的な患者イメージや病院の閉鎖的な環境、精神病院独特の制限やルールなどから、患者の良い面に着目する機会を見逃してしまうことがある。したがってポジティブ思考に基づいたケアを学ぶためには、まず学生自身がポジティブ体験をして、「喜びがあって、得るものあり」⁹⁾と感じられるような実習を行なっているのかを明らかにする必要があるのではないかと考えた。

学生の看護実践におけるポジティブ体験には、満足感や達成感に関するものがあり⁷⁻⁹⁾患者理解や患者との関わり、既習の学習、自己の成長、教員や臨床指導者との関わり、グループメンバーとの関わりなどが、学生の満足感や達成感の要因になると述べられていた。しかし、これらは主に学生のレポートやカンファレンスを資料としており指標を用いた文献は少なかった。

今回の研究に用いる近藤ら⁹⁾が開発した「精神看護額実習におけるポジティブ体験についてのアンケート」(Cronbach α 係数0.94)による研究では、ポジティブ体験があった学生は6割であり、その主な要因は、教師の傾聴・承認・的確な助言であった。また、「学びがあり良い体験だった」と捉えていたのは、困難状況を乗り越えたこと、コミュニケーションのと

り方がわかったことと、自分の成長を感じたことなどであった⁹⁾。

しかし、これらのポジティブ体験はあくまでも、質問項目からの分析でありその具体的な場面や対応などについては明らかにされていない。そこで近藤らのアンケートの各領域に自由記述欄を設け具体的な場面や対応を記入することにより数値データの裏付けとなる具体的な場面や背景が明らかになることが予測される。

本研究の研究目的は、精神看護学実習における学生のポジティブ体験とその背景を明らかにして、教育上の示唆を得ることである。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究対象者：A看護系大学の看護学科3年次生で精神看護学実習を履修し、研究参加への承諾を得た学生47名を研究対象とした。本研究では、性差から生じる要因を除去するために研究対象者を女性とした。

2. 調査期間

2017年10月～2018年2月

3. 用語の定義

1) ポジティブ体験⁹⁾

喜び、楽しさ、充実感といったポジティブな感情を伴う体験であり、かつ未来の自分にとって意義があると感じられる体験

2) ポジティブ評価⁹⁾

質問紙への回答において、ポジティブ体験ができたという肯定的回答をいう。

4. 調査方法

調査方法は、無記名による自己記入式質問紙調査法とした。臨地実習オリエンテーション時に研究対象者へ研究の概要について説明し臨地実習の学内実習時に再度説明し調査用紙を配布した。研究対象者の自由意志を尊重するため回収はその場で行わず、研究参加の意思がある場合は、期日までに専用の質問紙回収箱への投函を依頼した。

調査内容は、「精神看護学実習におけるポジティブ体験についてのアンケート」であり内容は、領域Ⅰ. 実習全体(3項目)、領域Ⅱ. 受け持ち患者(5項目)、領域Ⅲ. 学生自身(5項目)、領域Ⅳ. 看護実践(6項目)、領域Ⅴ. 病棟と臨床指導者(4項目)、領域Ⅵ. 教員(3項目)、領域Ⅶ. 実習グループ(3項目)、領域Ⅷ. 精神看護への関心(3項目)の8領域に分類される32項目である。回答法は「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の6段階の選択肢式である。なお各項目には自由記述欄を設けた。

5. 分析方法

各項目の得点の相関関係はPearsonの相関係数を求め分析した。統計処理には統計ソフトstatcel4を用いた。

Ⅲ. 研究における倫理的配慮

研究対象者には、文書及び口頭で研究の趣旨を説明した。研究参加は自由意思であり、不参加であっても成績には影響しないこと、研究結果を論文として公表するが、質問紙は無記名式とし、個人が特定されることはなくプライバシーは保護され、個人情報は一切公表しないことを口頭及び文書で説明し調査用紙の提出をもって同意とした。

本研究は、A大学の倫理審査委員会で承認を得て実施した。なお、「精神看護学実習におけるポジティブ体験についてのアンケート」の使用にあたっては開発者である近藤から許可を得た。

Ⅳ. 結 果

46名の学生から質問紙への回答を得た。回収率は97.8%であった。

1. 精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価(表1)

領域別平均得点の得点範囲は1点から6点であった。領域別平均得点は、実習全体について質問した『領域Ⅰ. 実習全体』が5.18点、実習課題に関連する体験について質問した『領域Ⅱ. 受け持ち患者』『領域Ⅲ. 学生自身』『領域Ⅳ. 看護実践』が5.16, 5.01, 4.85、臨床指導者・教員からの実習サポートについて質問した『領域Ⅴ. 病棟と臨床指導者』『領域Ⅵ. 教員』『領域Ⅶ. 実習グループ』が5.48, 5.44, 5.72点であった。実習後の精神看護への関心を質問した『領域Ⅷ. 精神看護への関心』が5.02点であった。平均得点が5点代であった7領域、『領域Ⅰ. 実習全体』『領域Ⅱ. 受け持ち患者』『領域Ⅲ. 学生自身』『領域Ⅴ. 病棟と臨床指導者』『領域Ⅵ. 教員』『領域Ⅶ. 実習グループ』『領域Ⅷ. 精神看護への関心』については図1(項目3, 項目6, 項目11, 項目20-29)に示すように、「非常にそう思う, かなりそう思う」の範囲でポジティブ評価があった。その中では、『領域Ⅶ. 実習グループ』が5.72点と最も高かった。

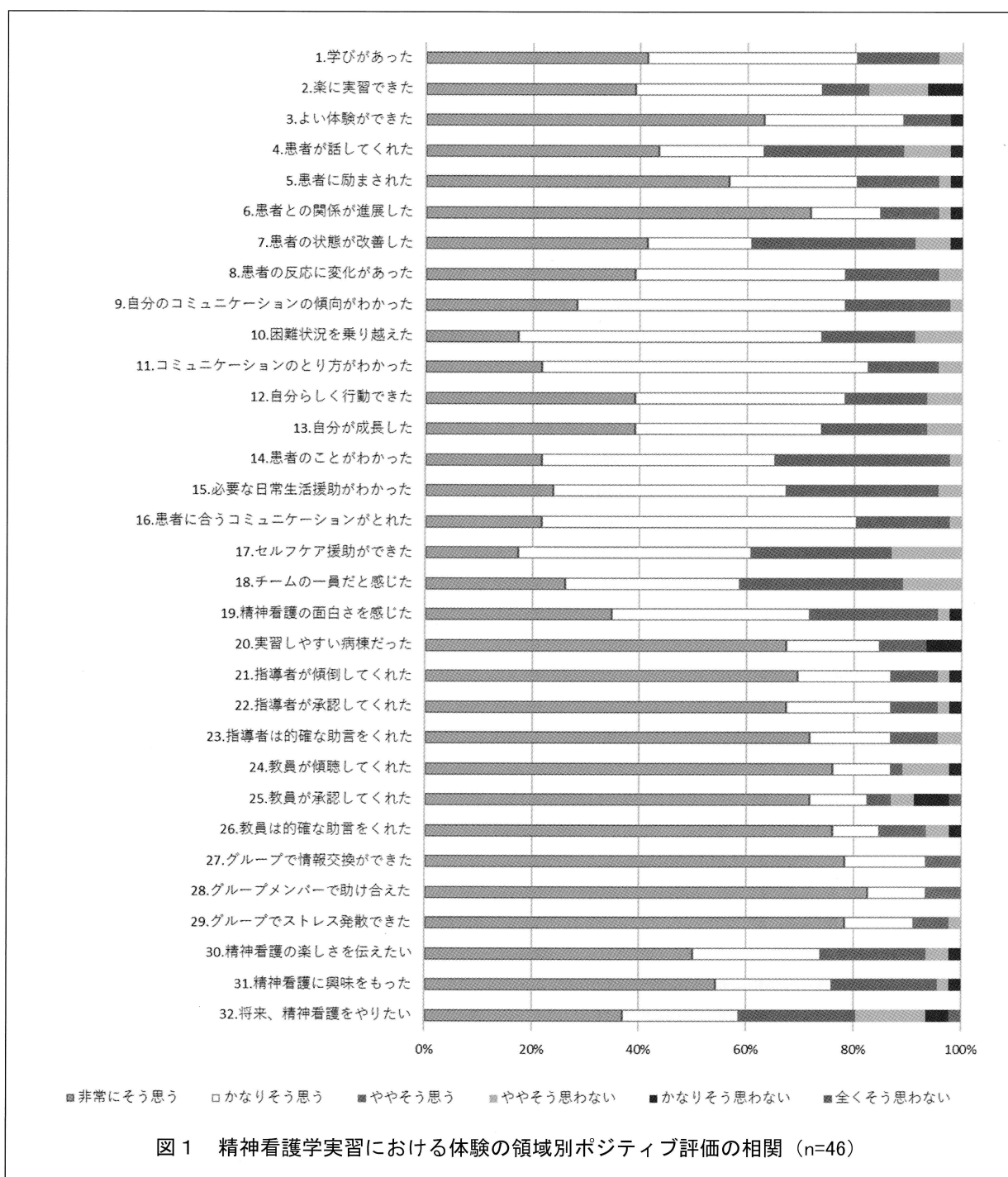
また平均得点4点代であった1領域『領域Ⅳ. 看護実践』については図1(項目9-11, 項目14-17)に示すように主に「かなりそう思う, ややそう思う」の範囲でポジティブ評価があった。

なお各領域の標準偏差は0.08点～0.55点の範囲であり、『領域Ⅳ. 看護実践』が最も高かった(0.55点)。

表1 精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価 (n=46)

領 域	平均得点 ^{注)}	標準偏差
I. 実習全体 (3項目: No. 1-3)	5.18	0.52
II. 受け持ち患者 (5項目: No. 4-8)	5.16	0.52
III. 学生自身 (5項目: No. 9-13)	5.01	0.45
IV. 看護実践 (6項目: No. 14-23)	4.85	0.55
V. 病棟と臨床指導者 (4項目: No. 20-23)	5.48	0.06
VI. 教員 (3項目: No. 24-26)	5.44	0.12
VII. 実習グループ (3項目: No. 27-29)	5.72	0.08
VIII. 精神看護への関心 (3項目: No. 30-32)	5.02	0.41

注) 領域 I ~ VIII の得点は 1 点から 6 点で、3.5 点以上がポジティブ評価を示す



2. 精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価の相関 (表2)

『領域Ⅰ. 実習全体』のポジティブ評価とすべての領域で強い相関が示された。『領域Ⅱ. 受け持ち患者』($r=0.62^{***}$)、『領域Ⅲ. 学生自身』($r=0.57^{***}$)、『領域Ⅳ. 看護実践』($r=0.66^{***}$)、『領域Ⅴ. 病棟と臨床指導者』($r=0.67^{***}$)、『領域Ⅵ. 教員』($r=0.76^{***}$)、『領域Ⅶ. 実習グループ』($r=0.80^{***}$)、『領域Ⅷ. 精神看護への関心』($r=0.70^{***}$)。特に『領域Ⅵ. 教員』($r=0.76^{***}$)、『領域Ⅶ. 実習グループ』($r=0.80^{***}$)、『領域Ⅷ. 精神看護への関心』($r=0.70^{***}$)において非常に強い相関があった。

各領域間では、『Ⅲ. 学生自身』と『Ⅱ. 受け持ち患者』($r=0.70^{***}$)、『Ⅳ. 看護実践』と『Ⅱ. 受け持ち患者』($r=0.75^{***}$)、『Ⅲ. 学生自身』($r=0.81^{***}$)、『Ⅶ. 実習グループ』と『Ⅴ. 病棟と臨床指導者』($r=0.84^{***}$)、『Ⅵ. 教員』($r=0.89^{***}$)に非常に強い相関が示された。

3. 精神看護学実習における体験のポジティブ評価の割合 (図1)

ポジティブ評価の割合を全32項目について各領域別に検討した。

『領域Ⅰ. 実習全体』の3項目では「1. 学びがあった」「2. 楽に実習できた」「3. 良い体験ができた」は「非常に、かなりそう思う」回答が7割以上あり、特に「3. 良い体験ができた」は9割を占めていた。

『領域Ⅱ. 受け持ち患者』『領域Ⅲ. 学生自身』『領域Ⅳ. 看護実践』を構成する16項目では、「非常に、かなりそう思う」回答が7割以上あったのは、10項目で、「5. 患者に励まされた」「6. 患者との関係が進展した」「8. 患者の反応に変化があった」「9. 自分のコミュニケーション傾向がわかった」「10. 困難状況を乗り越えた」「11. コミュニケーションのとり方がわかった」「12. 自分らしく行動できた」「13. 自分が成長した」「16. 患者に合うコミュニケーションがとれた」「19. 精神看護の面白さを感じた」であった。反対に「非常に、かなりそう思う」という回答が6

割に届かなかったのは「18. チームの一員だと感じた」の1項目だった。『領域Ⅴ. 病棟と臨床指導者』『領域Ⅵ. 教員』『領域Ⅶ. 実習グループ』を構成する10項目では、すべての項目で「非常に、かなりそう思う」回答が8割を超えていた。なかでも「27. グループで情報交換できた」「28. グループメンバーで助け合えた」が95%を超えていた。

『領域Ⅷ. 精神看護への関心』では、「30. 精神看護の楽しさを伝えたい」「31. 精神看護に興味をもった」の2項目で「非常に、かなりそう思う」回答が7割以上あったが、「32. 将来、精神看護をやりたい」は6割に満たなかった。

4. 精神看護実践における体験のポジティブ評価に関する項目間の相関 (表3)

実習全体のポジティブ評価と精神看護への関心は、実習中のどのような体験と関連するのかを調べるために、『領域Ⅰ. 実習全体』『領域Ⅷ. 精神看護への関心』に含まれる6項目と、『領域Ⅱ』『領域Ⅲ』『領域Ⅳ』『領域Ⅴ』『領域Ⅵ』『領域Ⅶ』に含まれる26項目との関連を検討した。

まず『領域Ⅰ. 実習全体』の構成項目である「1. 学びがあった」「2. 楽に実習できた」「3. 良い体験ができた」の3項目すべてと0.4以上の相関があった項目は、「8. 患者の反応に変化があった」「12. 自分らしく行動できた」「19. 精神看護の面白さを感じた」「24. 教員が傾聴してくれた」「25. 教員が承認してくれた」「26. 教員は的確な助言をくれた」の6項目であった。

また『領域Ⅷ. 精神看護への関心』の構成項目である「30. 精神看護の楽しさを伝えたい」「31. 精神看護に興味をもった」「32. 将来、精神看護をやりたい」の3項目すべてと0.4以上の相関があった項目は上記の6項目に「4. 患者が話してくれた」「5. 患者の励まされた」「11. コミュニケーションのとり方が分かった」「13. 自分が成長した」「16. 患者に合うコミュニケーションができた」「20. 実習しやすい病棟だった」「22. 指導者が承認してくれた」「23. 指導者は的確な助言

表2 精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価の相関 (n=46)

領 域	I. 実習全体	II. 受け持ち患者	III. 学生自身	IV. 看護実践	V. 病棟と指導者	VI. 教員	VII. 実習グループ	VIII. 精神看護への関心
I. 実習全体	1.00 ^{***}							
II. 受け持ち患者	0.62 ^{***}	1.00						
III. 学生自身	0.57 ^{***}	0.70 ^{***}	1.00					
IV. 看護実践	0.66 ^{***}	0.75 ^{***}	0.81 ^{***}	1.00				
V. 病棟と臨床指導者	0.67 ^{***}	0.39 ^{**}	0.44 ^{**}	0.57 ^{***}	1.00			
VI. 教員	0.76 ^{***}	0.47 ^{**}	0.46 ^{**}	0.50 ^{**}	0.56 ^{***}	1.00		
VII. 実習グループ	0.43 ^{***}	0.42 ^{***}	0.33 ^{***}	0.40 ^{***}	0.37 ^{***}	0.57 ^{***}	1.00	
VIII. 精神看護への関心	0.73 ^{***}	0.56 ^{***}	0.59 ^{***}	0.69 ^{***}	0.58 ^{***}	0.70 ^{***}	0.43 ^{***}	1.00

* p < .05 ** p < .01 *** p < .001

表3 精神看護学実習における体験の領域別ポジティブ評価の相関 (n = 46)

領 域	項 目	I . 実習全体			VIII . 精神看護への関心		
		1. 学びが あった	2. 楽に実習 できた	3. よい体験 ができた	30. 楽しさを 伝えたい	31. 興味を もった	32. 将来 やりたい
II . 受け持ち患者	4. 患者が話してくれた	0.52***	0.37**	0.51***	0.47**	0.41**	0.56***
	5. 患者に励まされた	0.39**	0.51***	0.59***	0.44**	0.60***	0.62***
	6. 患者との関係が進展した	0.39**	0.36*	0.43**	0.33*	0.39**	0.40**
	7. 患者の状態が改善した	0.33*	0.36*	0.34*	0.29	0.22	0.29
	8. 患者の反応に変化があった	0.45**	0.45**	0.47**	0.50***	0.41**	0.46**
III . 学生自身	9. 自分のコミュニケーションの傾向が わかった	0.19	0.12	0.35**	0.19	0.31*	0.23
	10. 困難状況を乗り越えた	0.36*	0.20	0.32*	0.45**	0.38**	0.35*
	11. コミュニケーションのとり方が わかった	0.43**	0.37*	0.47***	0.44**	0.46**	0.43**
	12. 自分らしく行動できた	0.58***	0.55**	0.58***	0.58***	0.54***	0.49***
	13. 自分が成長した	0.58***	0.32*	0.50***	0.59***	0.59***	0.54***
IV . 看護実践	14. 患者のことがわかった	0.47***	0.19	0.52***	0.38**	0.50***	0.50***
	15. 必要な日常生活援助がわかった	0.44**	0.20	0.44**	0.28	0.39**	0.42**
	16. 患者に合うコミュニケーションが とれた	0.63***	0.31*	0.65***	0.59***	0.64***	0.57***
	17. セルフケア援助ができた	0.45**	0.30*	0.39**	0.34*	0.41**	0.34*
	18. チームの一員だと感じた	0.43**	0.35*	0.35*	0.44**	0.48***	0.34*
	19. 精神看護の面白さを感じた	0.64***	0.65***	0.70***	0.87***	0.81***	0.79***
V . 病棟と 臨床指導者	20. 実習しやすい病棟だった	0.71***	0.34*	0.78***	0.57***	0.56***	0.57***
	21. 指導者が傾聴してくれた	0.54***	0.31*	0.58***	0.46**	0.40**	0.37**
	22. 指導者が承認してくれた	0.69***	0.22	0.65***	0.46**	0.44**	0.42***
	23. 指導者は的確な助言をくれた	0.65***	0.38**	0.73***	0.57***	0.62***	0.50***
VI . 教員	24. 教員が傾聴してくれた	0.57**	0.64***	0.68***	0.65***	0.69***	0.67***
	25. 教員が承認してくれた	0.59***	0.64***	0.72***	0.65***	0.71***	0.60***
	26. 教員は的確な助言をくれた	0.58***	0.62***	0.69***	0.66***	0.71***	0.59***
VII 実習グループ	27. グループで情報交換ができた	0.37*	0.45**	0.60***	0.48***	0.54***	0.39**
	28. グループメンバーで助け合えた	0.27*	0.28	0.48***	0.41**	0.46**	0.31*
	29. グループでストレス発散できた	0.17	0.22	0.35*	0.38**	0.34*	0.19

* p < .05 ** p < .01 *** p < .001

をくれた」を加えた14項目であった。

実習のポジティブ評価と精神科看護への関心の双方に関連していたのは、患者の反応に変化があったこと、自分らしく行動できたこと、精神看護の面白さを感じたこと、教員の傾聴・承認・助言などであった。なお『領域Ⅵ. 教員』の3項目は『領域Ⅰ. 実習全体』『領域Ⅷ. 精神看護への関心』の6項目と0.5以上の相関があり、教員の傾聴・承認・助言が、実習全体のポジティブ評価と精神看護への関心に強く影響していることが示された。

また、項目別では「8. 患者の反応に変化があった」「12. 自分らしく行動できた」「19. 精神看護の面白さを感じた」が0.4以上の相関があった。

『Ⅴ. 病棟と臨床指導者』は『領域Ⅷ. 精神看護への関心』では、「21. 指導者が傾聴してくれた」を除きすべての項目で0.4以上の相関があった。『領域Ⅰ. 実習全体』のうちの2項目「1. 学びがあった」「3. よい体験ができた」と0.4以上の相関があったのは「4. 患者が話してくれた」「11. コミュニケーションのとり方がわかった」「13. 自分が成長した」「14. 患者のことがわかった」「15. 必要な日常生活援助がわかった」「20. 実習しやすい病棟だった」など16項目であった。その中で「16. 患者に合うコミュニケーションがとれた」「19. 精神看護の面白さを感じた」「20. 実習しやすい病棟だった」「22. 指導者が承認してくれた」「23. 指導者は適切な助言をくれた」は0.6以上の強い相関があった。

一方、「2. 楽に実習できた」「3. よい体験ができた」の2項目と0.4以上の相関があったのは、「5. 患者に励まされた」「8. 患者の反応に変化があった」「12. 自分らしく行動できた」「19. 精神看護の面白さを感じた」「4. 教員が傾聴してくれた」「27. グループで情報交換できた」など8項目であった。その中で「19. 精神看護の面白さを感じた」「21. 教員が傾聴してくれた」「25. 教員が承認してくれた」「26. 教員は適切な助言をくれた」は0.6以上の強い相関があった。

『領域Ⅷ. 精神看護への関心』の3項目と0.4以上の相関のあった項目は、「4. 患者が話してくれた」「5. 患者に励まされた」「8. 患者の反応に変化があった」「11. コミュニケーションのとり方がわかった」「13. 自分が成長した」「16. 患者に合うコミュニケーションがとれた」など12項目であった。その中で「19. 精神看護の面白さを感じた」「21. 教員が傾聴してくれた」「25. 教員が承認してくれた」「26. 教員は適切な助言をくれた」は0.6以上の強い相関があり、特に「19. 精神看護の面白さを感じた」は0.80以上のかなり強い相関があった。

『領域Ⅷ. 精神看護への関心』の「31. 精神看護に

興味をもった」「32. 将来、精神看護をやりたい」の2項目すべてと0.4以上の相関があったのは「4. 患者が話してくれた」「8. 患者の反応に変化があった」「12. 自分らしく行動できた」「14. 患者のことがわかった」「20. 実習しやすい病棟だった」「23. 指導者は的確な助言をくれた」など12項目であった。その中で「5. 患者に励まされた」「19. 精神看護の面白さを感じた」は0.6以上の強い相関があった。

5. 精神看護実践におけるポジティブ体験のアンケート項目における具体的場面

【 】は質問項目、「 」は小項目、＜斜体＞は学生の自由記述内容を示した。

【実習全体について】では「1. 学びがあった」＜アルコール依存症の方から“お酒を飲まないのは現実的には無理”と聞いて断酒のむずかしさや、再入院を繰り返す現実を見れた＞＜病棟内だけでなくデイケアや訪問看護を通じて精神科全体を学べた＞＜毎日のカンファレンスで患者や家族のニーズや状態を確認し患者中心の看護をしていることがわかった＞、「2. 楽に実習できた」＜病棟の雰囲気がとてもよく実習しやすかった＞、「3. 良い体験ができた」＜保護室に入り患者の思いや構造などについて考えることができた＞＜拒否が見られた時の見守りの看護が難しかった＞などの記述があった。

【受け持ちについて】には、「4. 患者が話してくれた」＜精神病患者ならではの気持ちがあると感じた＞＜実際に話ができてよかった＞、「5. 患者に励まされた」＜「看護師になれるよう頑張ってね」「私も入院生活頑張るから」3日目＞＜「自分にも元気な頃があったことを思い出し久しぶりに気分転換できた」と言ってくださり嬉しかった＞、「6. 患者との関係が進展した」＜遠くにいっても私の姿が見えたら笑顔で手を振ってくれた＞＜手作りのパンフレットを渡せたり、コーヒーと一緒に飲んだ＞、「7. 患者の状態が改善した」「8. 患者の反応に変化があった」＜日を重ねるにつれ入退院の原因になっている母親との関係について話を聞くことができた＞、＜妄想の中身が変化していった＞＜楽しい時間を本当にありがとうと言ってくれた＞などの記述があった。

【自分自身について】には、「9. 自分のコミュニケーション傾向がわかった」＜プロセスレコードで振り返り自分のコミュニケーションの問題を知った＞、「10. 困難状況を乗り越えた」＜学生が苦手な患者さんには距離をとって関わることを意識した＞、「11. コミュニケーションのとり方がわかった」＜自分からの質問が多く、患者さんが主体となり素直な気持ちを言えるようオープンクエスションや沈黙をとることが大切だと学んだ＞、「12. 自分らしく行動でき

た」＜タッチングやリハ活動で一緒に行動をしたことによって患者の不安が和らぎ不安緩和に役立ったと感じた＞、「13. 自分が成長した」＜患者さんのこと探り過ぎてあまり知られたくないことがあるということを考えて接していなかった＞＜普段のコミュニケーションと傾聴の時の対応は異なることがわかった＞などの記述があった。

【看護実践について】には、「14. 患者のことがわかった」＜入院前のできごとや体験話をしてくださり対象者の思いに共感できた＞、「15. 日常生活援助がわかった」＜怒りっぽいところがあったが気分が落ち着いてから活動に誘導した＞、「16. コミュニケーションがとれた」＜コミュニケーションをとるなかで、その患者さんをどんどん知ることができた＞、「17. セルフケア援助ができた」＜少し患者さんのことを知れた気がするが一般病棟よりも必要なケアが考えずらかった＞、「18. チームの一員だと感じた」＜病棟カンファレンスで患者さんの思いや現在の状況を伝えることができた＞、「19. 精神看護の面白さを感じた」＜自分がやった分だけ患者さんからの反応や進展がみられるところがありそこが面白いと思った＞などの記述があった。

【病棟・指導者・教員・実習グループ】には、「20. 実習しやすい病棟だった」＜スタッフのやさしさと配慮がとてもあったので充実した2週間となった＞＜病棟の雰囲気がよかった＞、「21. 指導者が傾聴してくれた」「22. 指導者が承認してくれた」「23. 指導者は的確な助言をくれた」＜2回指導者の方に個別指導をしていただいた＞＜看護師長に目標や計画についてアドバイスを頂き病棟全体で受け入れてもらっていると感じた＞＜コミュニケーションのとり方や質問に悩んでいる時具体的に助言がもらえた＞、「24. 教員が傾聴してくれた」「25. 教員が承認してくれた」「26. 教員は的確な助言をくれた」＜教員には何でも話すことができ心理的支えとなった＞＜次にどう行動すればよいかを一番に考えてもらい患者との関係を築けた＞＜先生の助言によって患者さんの見えない部分に気づき個別性のある看護を実施できた＞＜認める声掛けがなく自信をなくした＞、「27. グループで情報交換ができた」「28. グループメンバーで助け合えた」「29. グループでストレス発散できた」＜グループメンバーと患者の悩みを話し合い情報を共有し、カンファレンスを通じて学びを深められた＞などの記述があった。

【精神看護への関心】には、「30. 精神看護の楽しさを伝えたい」＜同じ病状でも症状や思いはそれぞれで、個別性を活かした看護を考える難しさや楽しさを感じ興味をもった＞、「31. 精神看護に興味をもっ

た」＜精神看護は取っつきにくいイメージを持っていたが、患者さんの言動の背景には自分の想像していなかった思いや経験があることが分かった＞＜コミュニケーションをとらないと見えてこないことがあり、関わりがとても大切だと思った＞「32. 将来、精神看護をやりたい」＜怖いというイメージがあったが、患者さんとかかわることで精神看護の面白さを実感し、もっと学んでみたいと思った＞などの記述があった。

V. 考 察

1. 精神看護実践における学生のポジティブ体験の領域別ポジティブ評価

領域別ポジティブ評価では、4.85点～5.72点の高いポジティブ評価をしている。特に「実習グループ」は最も高く、ポジティブな実習を行うためには学生同士のダイナミクスが重要となることが推察される。しかし、機能しない場合にはネガティブな結果が予想されるため、グループ編成には学生同士の相性や特性を十分検討する必要があると考える。

また、最も低かった「看護実践」では、病気のみを見るのではなく、その人を看るということを体験できるよう援助し患者の個性に合わせた看護の重要性や、プロセスレコードでの振り返りをとおして、自分のコミュニケーション傾向を自己洞察し患者との関係形成に役立てられるよう自己成長を促す関わりが教員には求められていると考える。

2. 精神看護実践における学生のポジティブ体験とその関連要因

精神看護実践におけるポジティブ体験とは、学生が実習中によかったと感じただけでなく将来においても意義があると感じた体験ということになる⁹⁾。本研究では実習全体のポジティブ評価を問うた『領域Ⅰ. 実習全体』と実習後の精神看護への関心を問うた『領域Ⅷ. 精神看護への関心』を近藤ら⁹⁾の研究に準じて精神看護学へのポジティブ体験として捉えた。この2領域に関連する『領域Ⅱ. 受け持ち患者』『領域Ⅲ. 学生自身』『領域Ⅴ. 病棟と臨床指導者』『領域Ⅵ. 教員』『領域Ⅶ. 実習グループ』の5領域の構成項目が、ポジティブ体験の関連要因とした。

『領域Ⅰ. 実習全体』と『領域Ⅷ. 精神看護への関心』を構成する6項目すべてにおいて7割強が「非常に、かなりそう思う」と回答しており、学生の7割以上に精神看護実践へのポジティブ体験があったことが捉えられた。この2領域と相関が強かったのは『領域Ⅵ. 教員』であった。近藤ら⁹⁾の結果と同じように教員の傾聴・承認・的確な助言が、精神看護学実習へのポジティブ体験の主要な関連因子となってい

ることが明らかとなった。本研究では他にも、『領域Ⅱ．受け持ち患者』の「8. 患者の反応に変化があった」、『領域Ⅲ．学生自身』の「12. 自分らしく行動できた」、『領域Ⅳ．看護実践』の「19. 精神看護の面白さを感じた」で相関がみられた。

教員や実習指導者の関わりは学生の実習満足感・達成感に影響することは先行研究でも報告されている^{8) 9) 10)}。困難な状況における教員や指導者の支持的な態度や指導は実習の達成感に影響⁸⁾し、意欲を高める言葉と態度、思考と実践を高める教授技術¹¹⁾は学生の成長を助けるといわれている。

本研究では、学生4～5人に対して教員1人が2週間連続して行った指導やサポートに対し「教員には何でも話すことができ心理的支えとなった」として捉えられ「次にどう行動すればよいかを一番に考えてもらい患者との関係を築けた」「先生の助言によって患者さんの見えない部分に気づき個性のある看護を実施できた」など学生心情の受容と共感に困難な状況を経験している場合に特に必要な教授活動⁸⁾が行われたともいえる。しかし、「認める声掛けがなく自信をなくした」とネガティブ体験となる可能性も孕んでいる。教員の威圧的で心情を理解しない態度は学生を委縮させ、できない現実を突きつけられることで自信の喪失につながる。また、学生は教員の意図に反した受け止めかたをすることがあるため¹²⁾学生の反応を自覚しメッセージにこめられた背景を十分に吟味した指導のあり方が求められる。

3. 学生にとって学びがあったこと、楽に実習できたこと、よい体験ができたこと

『領域Ⅰ．実習全体』の構成項目の「学び」と「よい体験」に関連した体験は、患者が話してくれたこと、コミュニケーションのとり方に分かったこと、自分らしく行動できたこと、自分が成長したこと、患者のことが分かったこと、日常生活援助が分かったこと、患者に合うコミュニケーションがとれたこと、実践しやすい病棟だったこと、指導者の傾聴、承認、的確な助言などであった。「学び」と「よい体験」の2項目は近藤ら⁹⁾が達成感や、満足感を意図した項目であり、これらの体験は学生にとって達成感や満足感に影響すると考えられる。これら10項目は「非常に、かなりそう思う」の割合が6割強から9割弱であり高い得点だった。精神看護学実習の達成感の患者との関わりにおいては、患者とのコミュニケーションの取り方や必要な日常生活援助が分かったこと、学生自身においては、自分らしく行動できたこと、自分が成長したことが関連していた。

学生は患者が自分らしい生活を送るためには、自尊心やセルフケア能力を高めるような援助を必要と

することを看護実践のなかで患者を通して学ぶ。そして、看護介入における自らのコミュニケーション傾向による自己洞察から関係の構築に繋げられることにより、自分自身の努力や成長が達成感につながり、状況判断の能力や問題解決能力が身につくことにより自立した行動がとれる⁸⁾ことが考えられる。

相関のあった『Ⅴ．病棟と臨床指導者』はすべての項目で0.54以上の相関があった。

精神科看護実習では学生の患者への関わりすべてが精神療法の一部となるため他領域に比べ治療的コミュニケーションの場面が多くなる¹²⁾ために、患者との対応において「コミュニケーションのとり方や質問に悩んでいる時具体的に助言がもらえた」と、患者との間に良好な人間関係を形成し、患者が回復に向かえるように看護師が治療の道具となる¹³⁾ことを具体的場面を通じて形式知や経験知を基に臨床指導者は伝えていることが推察できる。このように振り返るだけでなく、看護者の自らの治療的役割にまで発展させることが精神看護学実習の学びを深めるためにも必要であると考えられる。

また学生は、「看護師長に目標や計画についてアドバイスを頂き病棟全体で受け入れてもらっていると感じた」「病棟カンファレンスで患者さんの思いや現在の状況を伝えることができた」などチームの一員としての実感を得ていた。このような学びを手がかりとして学生は主体的にかかわることが可能となる。臨床指導者の適切な指導が『領域Ⅱ．受け持ち患者』、『領域Ⅲ．学生自身』、『領域Ⅳ．看護実践』の体験に大きく反映されることが容易に推察できる。そのためにも教員や臨床指導者は連携を深め学生の実感を大事にして内的動機づけが発揮されるよう配慮する必要があると考える。

次に、『領域Ⅰ．実習全体』の構成項目の「楽に」と「よい体験」の2項目に関連していたのは、患者に励まされたこと、患者に反応の変化があったこと、自分らしく行動できたこと、精神看護の面白さを感じたこと、グループで情報交換できたことなどであった。

実習初期は、患者に関わっていけるかという未知な事柄への不安と期待が混在しているアンビバレントな感情¹⁾を抱いて実習に臨んでいる。相手にどうしたら受け入れられるかという方法を手探りで模索しながら相手を理解しよう、相手を知ろうという姿勢で関わることにより、「看護師になれるよう頑張ってる」「私も入院生活頑張るから」3日目と受容・共感しようとする学生の姿勢が患者に受容されることにより今までの精神障害者へのイメージが変化してゆくことが推察できる。

また、学生は自らが疑問や困難と感じた場面では、プロセスレコードや指導者や教員、他学生とのグループカンファレンスを通じて「グループメンバーと患者の悩みを話し合い情報を共有し、カンファレンスを通じて学びを深められた」と感じており、同じ立場の仲間から意見をもらい支えられている体験から内省や対象理解への足掛かりとなっていることが推察される。そのためにも、学生の陰性感情を含めた自らの感情を言語化して表現できるよう学生主体のグループカンファレンスの運営を指導するのも重要な教員の役割である¹⁴⁾。

4. 精神看護への関心につながるポジティブ体験

『領域Ⅷ. 精神看護への関心』の「興味を持った」「将来やりたい」の項目に関連していたのは、患者が話してくれたこと、コミュニケーションのとり方が分かったこと、自分が成長できたこと、患者のことがわかったこと、患者に合うコミュニケーションがとれたこと、実習しやすい病棟だったこと、教員の関わりなど質問項目の29項目中15項目であり、「将来やりたい」では「怖いというイメージがあったが、患者さんとかかわることで精神看護の面白さを実感し、もっと学んでみたいと思った」など17項目と関連があった。

なんとなく怖いという抽象的なイメージは患者との具体的な関わりを通してポジティブな内容に変化している。ポジティブ評価においても「そう思う」という回答が8割を占めており、実習によって患者とのコミュニケーションが成立し、自己の成長を感じ、実習のしやすさや指導者・教員との関わりにおいて体験的によいイメージや肯定的感情を得ることにより、将来、精神看護をやりたいという関心につながっていることが推察された。

5. 本研究の限界

本研究は、A看護系大学の看護学科3年次生46名を対象とした研究であり研究協力者が少ないことから、一般化するには十分とは言えない。今後はサンプル数を増やして調査することが求められる。

Ⅵ. 結 論

本研究では、「精神看護学実習におけるポジティブ体験についてのアンケート」の結果を分析することによって精神看護学実習における学生のポジティブ体験とその背景が明らかになった。

1. ポジティブ評価は実習グループが最も高く、学生同士のダイナミクスが重要であることが推察できる。
2. 精神看護学実習でポジティブ体験があった学生は7割以上あり、特に「良い体験ができた」は9割を

占めていた。主要な関連因子は教員の傾聴・承認・的確な助言と患者の反応に変化があったこと、自分らしく行動できたこと、精神看護の面白さを感じたことなどであった。

3. 精神看護学実習の達成感には、患者とのコミュニケーションの取り方や、必要な日常生活援助が分かったこと、学生自身においては、自分らしく行動できたこと、自分が成長したことが関連していた。
4. 患者とのコミュニケーションの成立、自己成長の実感、実習のしやすさや指導者・教員との関わりが精神看護をやりたいという関心につながっていた。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

<引用・参考文献>

- 1) 太田友子, 廣瀬春次, 水津達郎, 中村仁志, 井上真奈美: 精神看護学実習前後における看護大学生が精神科看護の対して抱く思いに関する分析, 山口県立大学学術情報, 第5号, 看護栄養学部紀要, 通巻第5号, 1-10, 2012
- 2) 高橋美美, 戸田由美子: 精神看護学実習における技術到達に関する研究. 高知大学看護学会誌, 3-12, 2010
- 3) 入澤友紀, 田村文子: 精神看護学実習における学生の「学び」の内容分析—感想文における患者—看護者の相互行為に参加しての「学び」—. 群馬県立医療短期大学紀要 10, 71-78, 2003
- 4) 東中須恵子, 村木士郎, 岡本響子: 精神看護学臨地実習における看護学生の学びに関する研究—学生の記述からみる学びの分析—. 呉看護大学紀要, 31-38.2009
- 5) 高橋香織, 片岡三佳: 精神看護学臨地実習終了後のレポート分析からみた学び. 岐阜県立看護大学紀要, 6巻1号, 2005
- 6) 田村裕子, 児玉豊彦, 小森照久: 精神看護学実習における看護学生の体験と学び, 三重看護学誌, 18(1) 23-30, 2016
- 7) 原田秀子: 臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討, 山口県立大学看護学部紀要, 第8号, 93-98, 2004
- 8) 原田秀子: 臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の分析(第3報)—4年次学生に対しての縦断調査を通して—, 山口県立大学看護学部紀要, 第10号, 29-37, 2006
- 9) 近藤浩子, 阿達瞳, 秋山美紀, 林世津子: 精神看護学実習における学生のポジティブ体験とその要因

- に関する研究, 東京保健医療大学紀要, 第8巻, 第1号, 9-19, 2013
- 10) 清水小織, 原田慶子: 精神科看護実習指導における看護教員と臨地実習指導者との連携—看護教員が臨地実習指導者との連携で大切にしていること—第44回日本看護学会論文集, 看護教育, 256-259, 2014
- 11) 山田知子, 堀井直子, 近藤暁子, 渋谷菜穂子他: 看護学生の認知する臨地実習での効果的・非効果的な指導者の関わり, 生命健康科学研究所紀要 vol17, 13-23, 2010
- 12) 水落 幸, 日下和代, 高橋ゆかり: 看護学生の精神看護学実習前後における対人関係能力の変化, 第45回日本看護学会論文集 看護教育, 158-161, 2015
- 13) 川野雅資編: 精神看護学Ⅱ 精神臨床看護学, 第5版, ヌーヴェルヒロカワ, 6-7, 2013
- 14) 大澤亜貴子, 松岡晴香, 浅沼奈美: 精神看護学実習における学生の学びと精神看護分野への職業選択との関連, 杏林大学保健学部紀要, 25-31, 2010
- 15) 竹之内聡子: 看護学生への臨床実習におけるユーモアの効果, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 34, 86-92, 2009
- 16) 中川幸子, 鈴木啓子, 永井優子, 他: 看護学生の精神科医療への就業意欲に起案する諸要因の検討—文章完成法による分析—, 千葉大学看護学紀要, 16, 101-105, 1994
- 17) 松田宣子・清水美生・野崎香野: 精神科実習の教育に関する研究, 第27回日本看護学会論文集看護教育, 11-13, 1996.

The Analysis of Students' Positive Experience in Mental Health Nursing Practicum

Yoshihiro Shimono

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words: positive experience, mental health nursing practicum, nursing students

Abstract

This paper aims at analyzing students' positive experience in Mental Health Nursing Practicum and its backgrounds. 46 Nursing students of the third year participated in the survey. The survey used herein is "The Survey of Positive Experience in Mental Health Nursing Practicum" developed by Kondo et al⁹⁾. The questions consist of 32 items, covering eight areas of overall practicum estimation, reactions of patients in charge, students' communication acts, nursing practice, clinical instructor's approval and advice, teacher's approval and advice, practicum group, and interest in Mental Health Nursing.

The survey result shows the positive evaluation of eight areas ranges from 4.85 to 5.72 and that the highest is that of practicum group. The main related factors in the overall practicum positive evaluation are the teacher's listening, approval and accurate advice, the changes in patients' reactions, ability to act as usual, and realization of interest in Mental Health Nursing. The sense of accomplishment in Mental Health Nursing Practicum is related to communication methods with patients, the understanding needed supports in daily life as well as student's own feeling of being able to act as usual and of their own growth. Communication establishment with patients, realization of self-growth, easiness of practicum and relation with instructors and teachers are found to contribute to the students' motivation to do Mental Health Nursing.
